

情報技術の匠

PROFESSIONAL

第47回

知的財産の匠

結べば、そこに何かが生まれる。

「振り返ってみれば、1985年は自分にとって思い出深いものだったかもしれません」

1985年。太佐、高校2年生。大阪在住だった太佐への「1985年の贈り物」は2つあった。1つは、大阪を熱狂の渦に巻き込んだ阪神タイガースの優勝。そして、もう1つの贈り物。それが大げさにいえば運命を変えたものだった。

太佐が手掛ける業務は、特許、商標、著作権の分野から各種契約のサポートまで多岐にわたる。特許というものが生まれて以来、この企業の知的資産を保護するという、

仕事の重要性は変わらない。しかし、と太佐は言う。

「昔、この部門は特許部という名前でした。それが知的財産部になってきたことは、ある意味、象徴的です。知的財産に関する業務は多様化しており、また知的財産に対する企業の考え方にも大きな変化が出てきています」

以前は企業が保有する権利を独占的かつ排他的に守ることが業務の主眼だった。今も基本的な業務自体は変わらないが、発想としては、守るだけではなく、さらにこれをいかに活用していくか、そして知的財産をテコにいかにかにヒトやモノ、企業を結び付けてビジネスに貢献

していくのが重要となっている。

所有物を守る、という企業防衛の視点だけであればこういう考え方は生まれません。お互いの企業が知的資産を有効に相互活用しながら、全体としてビジネスを促進していく。それが知的財産をイノベーションの推進に利用する今の考え方だ。

クローズドからオープンへ、あるいはハードウェアからソフトウェア/サービスへの流れ、国境を越えての業務提携などが一般化するこの時代においては、1社で守り続けることよりも、複数のプレーヤーが時にコラボレーションすることによって、それぞれの企業にとって価値あるものを創出していこう、というのは合理的な考え方だろう。このような連携は実際に効果を生み出している。そして、さらに企業間だけではなく社会的な意義まで創出していく。

「例えば、エコ・パテントコモンズという取り組みがあります。これは環境にかかわる特許について、ほかに使わせないという発想から、逆に開放してみんなで使い合おうという発想へ考え方を転換するもの。IBMは設立メンバーとしてその試みに取り組んでいるんですよ」

太佐が知的財産の業務に取り組んでいて、やりがいに感じることに。それはまさに、人と人、企業と



太佐 種一 (たいさ たねかず)

日本アイ・ビー・エム株式会社
第1知的財産担当部長

【プロフィール】

1991年日本アイ・ビー・エムに入社。入社時より知的財産部に所属し、特許の出願・権利化、著作権領域を含む各種契約関係の業務などに従事。1998年弁理士登録。2002年から2004年まで米国IBM勤務。2004年末から第3知的財産担当を経て、2006年より現職。社外活動として、日本知的財産協会デジタルコンテンツ委員会委員長(2007、2008年度)、社団法人電子情報技術産業協会著作権専門委員会委員(2005年度～)など。

企業の結び付きから何かが生まれるのを目の当たりにすることにほかならない。



知的財産業務を担当する上では、法律と技術の両面の知識を要請されるため、弁理士の資格やこれに準じたスキルを持った者が中途入社するケースが多い。また、特許を扱うことから、この分野は理系出身者が圧倒的に多い。IBMのように、技術的な知的財産を多く抱えている場合にはなおさらだ。しかし、太佐はどれにも当てはまらない、というよりも、真逆。

「理系科目は苦手。それどころか高校時代は文学部志望の、超文系ですから(笑)。日本IBMの知的財産部門としては、後にも先にもあまり例のない新卒文系採用でした」

当初目指していた文学部から教師への道。その道を歩んでもあるいは成功していたかもしれない。それでも今、この道に進めたことに感謝している。そのきっかけをつくってくれたのが、1985年のもう1つの贈り物、高校の恩師からの何げない一言だった。

「『まあ、文学部もええけど、君やったらいろいろ幅広くやれる法学部もええと思うで』。どこまで私の可能性を感じてくれたのかは分かりませんが、この一言は大きなきっかけになりましたね」

その言葉を受けて法学部に入学した太佐だが、ここでは初めからほかの学生と目標が違っていた。

「実家が米屋。商売人の家に生まれたDNAがそうさせるのか、

法学部に入っても、あまり司法試験を受けて弁護士になろうとは強く思わなかったですね。たまたま、大学の特別講義で知った知的財産の分野に興味を持ち、何か先端的なモノを作っている民間企業がよいなどは思っていたんです」

特許で有名なIBMは格好のターゲットだった。そして異例の新卒採用という形で、太佐の希望はかなった。これはとても幸運なこと。その後は、知的財産の最前線とっていい米国で勤務、社外での委員会活動なども行いながら、振り返ればこの仕事を楽しんできた。知的財産というものを通じて、縁を結んでいくという仕事に誇りと働きがいを持って取り組んできたのだ。



楽しんでいる、といっても、ハードワークと努力の連続だった。

20代は、当時合格率3%という超難関の弁理士の資格を取るために、有給休暇すべてをその勉強のために費やした、といっても過言ではない日々。日常業務の中では多くのエキスパートからさまざまなことを学び、鍛えられてきた。

現在は、マネジメントも担当しながら、時間をみて技術系の勉強もしたいと考えている。一人でゆっくり過ごす時間はあまりなかったが、そのこと自体は、実はそれほど重要だとは思っていない。

「休日は大人しいものです。コーヒーを片手に仕事とまったく関係のないミステリーの文庫本を読んでいられればそれだけで幸せ」

それでも楽しい日々だと太佐は思

う。忙しくしているのは性に合っているかもしれないし、でも仕事だけに縛られているわけではない。太佐には、どこかひょうひょうとした雰囲気がある。それは何事も自分で選択し、そして何事にも楽しみを見つけているからなのだろう。「関西人」「商売人」、なるほど、こんなところにもDNAが。

そんな太佐にとって、今、最も大変だけれど、でも最も楽しい相手がいる。それは一人娘。

「せっかくの休みでも容赦なく朝から起こされて(笑)。ただでさえ休む時間がないのにと思いますけれど、でも一緒に公園や図書館に行ったり、家で遊んだり。そんな時間がとてもいい。子どもを育てるといっては、とてもクリエイティブなものなのだと思えます」

娘の名前にも今回のテーマに縁のある話が。

「あ、そういえば、娘の名前の中にも『結』という文字が含まれているんですよ。意識したわけではないんですが、こんなところにも結ぶが…」



単にIBMの知的資産を守るためだけにこの仕事をしているわけではない。知的財産を通じて、ヒトやモノ、企業を結び付けていくこと、そこから新しい何かを生み出すこと。これは仕事だけではなく、もともと太佐が求める人間関係すべてにいえることなのかもしれない。

高校の恩師との縁が自分の将来を開いたように、縁を結べば、新しいドラマが生まれてくる。その愉快さを、太佐は知っている。